様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ９ 月 １９ 日現在

機関番号：２４５０６
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2017～2018
課題番号：１７Ｈ０７０３０

研究課題名（和文）在日ビルマ難民の主観的健康を高めうる難民コミュニティのエスノグラフィ

研究課題名（英文）A focused ethnography of Burmese refugees' community in Japan to enhance their subjective health

研究代表者
竹村　和子（Kazuko, Takemura）

兵庫県立大学・看護学部・助教

研究者番号：３０７２４７３６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,400,000円

研究成果の概要（和文）：在日ビルマ難民の主観的健康を高めうる難民コミュニティの特性を明らかにするために、定期的にミーティングをもつ在日ビルマ難民コミュニティでの参加観察、インフォーマルインタビューおよび、対象コミュニティに参加している在日ビルマ難民4名とその会に参加している日本人1名を対象に、半構造化インタビューを行った。分析は、エスノグラフィの手法を用いた。その結果、4つのテーマが導き出された。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究の学術的意義は、在日ビルマ難民の生活と健康の実態と、在日ビルマ難民の主観的健康を高めうる難民コミュニティの特性を看護学の立場から明らかにしたことである。看護学研究においては、まだ難民を対象にした研究はごくわずかであり、本研究結果は、今後の難民に対する看護学研究の発展に寄与するものと考える。社会的意義は、難民という困難な状況にある人々への理解を進める一助となり得、看護職の実践に示唆を与える知見を得られたことである。

研究成果の概要（英文）：To identify the characteristics of Burmese refugees' community in Japan to enhance their subjective health, I regularly participated and observed the Burmese refugees' community meetings in Japan. I conducted informal interviews on participants during their meetings. Besides I conducted semi-structured interviews on four Burmese refugees and a Japanese who was participating in the community. The analysis was based on ethnographic methods. Four themes were derived from the results.

研究分野：看護学

キーワード：難民　在日ビルマ難民　難民コミュニティ　主観的健康

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

１．研究開始当初の背景

難民は、母国・移動中にトラウマ体験をし、受け入れ国でも困難な状況に置かれることが多く、メンタルヘルスが脅かされやすい（Fazel et al.2005）。さらに、近年、慢性疾患や生活習慣病の有病や発症リスクが高いことも指摘され（Bischoff et al. 2009）、複雑な健康課題を抱えやすいが、受け入れ国の難民政策や保健医療職者の難民への理解の低さ、言葉・文化の障壁などから、難民は保健医療へのアクセスが制限されている（Hadgkiss et al.2014)。

我が国で、これまでに、最も多く難民認定された、もしくは人道配慮による在留特別許可取得者は、ビルマ出身者である（公表数に限る）（法務省,2017；法務省,2012）。しかし、本国の情勢不安定により、依然難民認定申請者も多く（法務省,2020）、困難な状況で暮らしていることが報告されているが（森ら，2009；関,2012）、多くのビルマ難民が、我が国で暮らしているにもかかわらず、在日ビルマ難民の健康や生活に関する研究はごくわすかである。

健康や生活が脅かされている状況がある一方で、主観的健康感が良い人が多く、また多くの人が同じ民族の集まりに参加しており、（竹村、2017）、在日ビルマ難民の主観的健康には、難民コミュニティが大きく影響していることが考えられた。

２．研究の目的

在日ビルマ難民の主観的健康を高めうる難民コミュニティの特性を明らかにする。

３．研究の方法

1）保健医療福祉分野における難民コミュニティを対象とした研究に関する文献レビュー

本研究は難民コミュニティを対象としており、研究実施の時の参考にするため、文献レビューを行った。

2）在日ビルマ難民コミュニティでのフィールドワークとインタビュー

(1) 在日ビルマ難民コミュニティへの参加観察とインフォーマルインタビューの実施

定期的にミーティングを開催している在日ビルマ難民コミュニティでの参加観察を行った。定例ミーティング以外にも、彼らの食事会や、在日ビルマ難民が多く集まるお祭りにも参加した。また、情報収集のため、在日ビルマ難民を多く支援している日本人へもインタビューを行った。

(2) 対象コミュニティ参加者へのフォーマルインタビューの実施

参加観察を１年以上続けたところで、対象コミュニティの会合に、出席している頻度が多い４名と、その会に参加している日本人１名を対象に、半構造化インタビューを行った。

４．研究成果

(1) 保健医療福祉分野における難民コミュニティを対象とした研究の動向と成果、課題の明確化

海外の英語論文 40 件の文献を対象とした。最も多く研究が実施されていたのは米国であり、続いて豪州、レバノンなど、難民受け入れ国で実施されていた。難民の出身国は、パレスチナとソマリアが多かったが、多岐にわたっていた。主にコミュニティベースの調査・介入が報告されており、コミュニティを基盤とした参加型研究（CBPR）で行われた研究もあった。質的研究では、コミュニティの特性や、文化的なものの見方・健康行動、メンタルヘルスや子どもの齲歯など健

康課題にあてたものがあった。介入研究では、受け入れ国の医療従事者やソーシャルワーカー、学生などが行った健康教育やプロジェクトの実施が報告されていた。直接難民に介入する者もあったが、難民コミュニティの代表者への介入やコミュニティヘルスワーカーを介した難民コミュニティへの介入も報告されていた。

(2) 主観的健康観を高めうる難民コミュニティの特徴

①困難な状況を仲間とともに笑い飛ばそうとしていた

研究協力者たちは、先の見通しを立てられないことや、入国管理局にて帰国を勧められるなどストレスの多い状況におかれていた。ミーティングでも、話題がそのことになると、場が暗くなることは多々あったが、多くのことを冗談に変えて笑い飛ばそうとしていた。

また、たまに開催される食事会でも、音楽の話やカラオケを楽しみ、笑顔が絶えない場となっていた。

②同じような大変な目に遭っている人の役に立ちたいと思って参加していた

本会の目的の一つで、難民同士助け合う互助の会であり、本国で貧困等による困窮者や民主化運動を行っている人たちを助けるために、会費を送金していた。これは、他の在日ビルマ難民ではあまりないことで、この会に参加する動機になっていた。仏教の教えを基に、「困った人を助ける」ということが当たり前になっていることに加え、人の役に立ちたいという気持ちを持ち続け、人間の尊厳を保とうとしていることが推測された。

③難民申請・認定に関する情報収集の場となっていた

研究協力者たちは、難民申請や入管に関する情報を得るために参加していた。彼らの最大の関心事は、安定した立場で日本に住み続ける、いわゆる難民認定されるかということであり、その最新情報を入手する場でもあった。SNS も活用しながら情報収集を行っていたが、休日の貴重な時間、このミーティングに参加することで、生の情報を得ようとしていたということが考えられる。

④祖国の民主化活動に参加しているという信念を持っていた

対象コミュニティは、あくまでも政治団体であり、彼らも政治難民だという自覚、国の民主化活動に参加しているという信念を持っていた。

【引用文献】

Fazel, M., Wheeler, J., & Danesh, J. (2005) , Prevalence of serious mental disorder in 7000 refugees resettled in Western countries: A systematic review. Lancet, 365(9467), 1309-1314.

Bischoff, A., Schneider, M., Denhaerynck, K., Battegay, E. (2009). Health and ill health of asylum seekers in Switzerland: An epidemiological study. The European Journal of Public Health, 19(1), 59-64.

Hadgkiss.E.J.,Renzaho.A.M.(2014). The physical health status, service utilization and barriers to accessing care for asylum seekers residing in the community: a systematic review of the literature. Australian Health Review, 38,142-159.

法務省（2020,3 月 27 日）. 令和元年における難民認定者数等について http://www.moj.go.jp/nyuukokukanri/kouhou/nyuukokukanri03_00004.html

法務省（2017,2 月 10 日）.平成 28 年における難民認定者数等について.
http://www.moj.go.jp/nyuukokukanri/kouhou/nyuukokukanri03_00666.html
法務省（2012, 2 月 24 日）.昭和 57 年 1 月から平成 23 年 12 月末までの難民認定申請等の状況. http://www.moj.go.jp/content/000095188.pdf
森恭子, 櫻井美香.（2009）. 在日難民女性の生活実態と地域社会のかかわりー在日ビルマ難民女性の聞き取り調査を通してー. 社会福祉, 50, 67-81.
関聡介.（2012）.続・日本の難民認定制度の現状と課題. 難民研究ジャーナル, 2, 2－23
竹村和子.（2017）.在日ビルマ難民の健康状態の実態と関連要因の検討.愛知医科大学大学院看護学研究科修士論文.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計0件

〔学会発表〕　計2件（うち招待講演　0件／うち国際学会　1件）

１．発表者名 竹村和子
２．発表標題 保健医療福祉分野における難民コミュニティを対象とした研究に関する文献レビュー
３．学会等名 日本国際保健医療学会　第36回西日本地方会
４．発表年 2018年

１．発表者名 Takemura K., Sakamoto M.
２．発表標題 Aspects of Burmese Refugees’ Community in Japan to Enhance Their Subjective Health
３．学会等名 22nd EAFONS, Singapore（国際学会）
４．発表年 2019年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	坂本　真理子 (Sakamoto Mariko)		